

ある日、
ぶりつ子悪役令嬢になりまして。

登場人物
紹介

ペアトリクス

トライアの護衛。
凛々しい男装の麗人。

トライア

トバージェリア国 の第二王子。
ペアトリクスに
しゃちゅう叱られている。

フラウ

本来の乙女ゲームのヒロイン。
ゲームの優しい印象とは
全然違っていて……？

カイ

メイの双子の弟。
無口で表情に乏しい。

メイ

ライガの従者。
健気で愛らしい美少女。

ロイス

ガーネット国 の王子。
賢く穏やかな美少年。
自分に自信が持てず悩んでいる。

アシル

カミューの幼馴染で、
ロイスの腹心。
やや計算高いが、カミューには
掛け値なしに優しい。

カミュー

ゲームにおける悪役侯爵令嬢だが、
今の中身は元女子高生の愛美。
敬愛するロイスを護るために
魔法を極めようとする魔法オタク。

1 愛美、異世界へダイブする

「アンタのせいで、私はマコト君に振られたんだけどお？ 調子に乗らないでくれる？」

目の前の女子生徒に感情的に捲し立てられ、呆然と立ち竦む私。

近くを通る生徒達が、何事かとこちらに注目した……が、厄介事に巻き込まれるのは嫌なのだろう。彼らはそのまま、早足で去ってしまった。

チツ……薄情者め。

現在、私——相沢愛美は高校の階段の踊り場で、ギャル系のどぎついメイクをした女子生徒六人に詰め寄られていた。

季節は夏だ。風通しの悪いこの場所は非常に暑く、長く伸ばしたダークブラウンの髪が汗で肌に纏わり付いている。

私を取り囲んでいる彼女達だって、とても暑いはずなのに。わざわざご苦労なことだ。じわじわ滲む汗の感覚にイライラしつつ、私はぼそりと呟いた。

「こんな修羅場には、慣れていないんだけどな」

「対六という圧倒的に不利な状況で、私に逃げる術はない。」

私の呴きは聞こえなかつたようだが、態度が気に障つたらしい。目の前の女子生徒は怒鳴り出した。

「なによ！ 気に入らないなら言えよ！ このドロボーネコ！」

アイテープと付け睫毛のせいで、私を罵る彼女の目は人間離れした大きさになつてゐる。こうやつて迫られるに凄い迫力だ。

ちなみに私はギャルではない。清楚系のそそこイケている女子生徒……に擬態する、乙女ゲームが趣味のただのオタク女子だ。

乙女ゲームとは、女性向けの恋愛ゲームのうち、男女の恋愛をテーマとしたジャンルである。

プレイヤーがヒロインを操作し、攻略対象と呼ばれるイケメン男性キャラクターと疑似恋愛を楽しむというものだ。

物語の途中で選択肢が出現し、何を選ぶかによつて、イケメン達との関係が変わる。

いい選択肢を選び続ければ、お目当てのキャラクターとのハッピーエンドに辿り着けるのだ。逆に、悪い選択肢を選べば、バッドエンドが待つてゐる。

……正直、そこそこイケている女子高生を演じる上では、人には言えない趣味だ。

だから私は、高校では乙女ゲーマーの事実を隠し「ゲームなんてしませんよ。友達と買い物をしたり、カラオケに行つたりするのに忙しいんです」というキャラを作つてゐる。

オタク女だと思われたら、何かとやりにくいくらいだ。

私は割と要領のいい方で、スクールカースト最上位のギャル集団ではないが、クラスの中でかなり発言力を持つグループに属していた。

現在、私を取り囲む彼女達とも、付かず離れずの関係を築き、上手くやつてゐると思つていたのだ。この日までは――

「だから誤解だつてば！ マコト君とは、喋つたこともないのに……ああもう、困ったなあ」

本当に、どうしてこんな状況に陥つてしまつたのだろう。女子生徒達に何度も同じ説明をしているのだが、聞いてくれないのだ。感情的になつた人間程、話の通じないものはない。

私の必死の説得も虚しく、とうとう泣き喚き始めた彼女に対し、「マスカラとアイラインが取れて、キヨンシームみたいになつてゐる」と教えてあげた方がいいだらうか。

事の発端は、マコト君とやらの発言だつた。

マコト君はバスケット部のエースで、私と同じクラスの、そそこモテる男子生徒。そして私に因縁をつけているギャルの元カレである。彼は先日、彼女に一方的に別れを切り出したらしい。

その際、マコト君は非常にはた迷惑な理由を述べたそうだ。

『僕、相沢さんのことを好きになつてしまつたんだ』

相沢とは私のこと。彼のそんな言葉のせいで、私は現在、私がマコト君に色目をつかつたと勘違ひしたギャルと彼女の友人達に、盛大に詰め寄られるという憂き目に遭つてゐる。

もちろん、私は他人様の彼氏を誰かしなどしていなないし、マコト君から告白された覚えも全く

ない。

それどころか、彼とはほぼ喋ったことがない！ 言い切ろう！ 私は無実だ！
なのに、どうしてこんな風に詰られなければならないんだ……非常に理不尽である。マコトよ、
今すぐここに出てきて説明するのだ！

ああ、魔法なんかで、この場所に彼を呼び出せればいいのにな……
そうすれば万事解決だ！ ……著しく現実味に欠けるけれど。こんな場面でも、ゲーム的な発

想の自分に苦笑する。

……いけない、ついつい現実逃避をしてしまった。

「聞いてるの？ アンタ今すぐマコト君と別れてよ！ 一度と彼に近付かないで！」

彼女はまだ飽きもせずに、ワーワーと苦情を申し立てていた。

私はうんざりしつつ、誤解を解こうと精一杯の反論をする。

「いや、だから付き合っていないから！ 彼とはまともに喋ったこともないし、何かの間違いだと思
うんだ」

「嘘つかないでよお！」

残念ながら、逆上した女子生徒に私の言葉は届かない。

怒り狂つた彼女は、ついに私を突き飛ばすという暴挙に出た。私の腹に、女子生徒の張り手が見
事に決まる。

「ああっ！」

やばい、と思った時には体が宙に浮いていた。バランスを崩して、踊り場から足を踏み外した
のだ。

落ちる――

私を突き飛ばした女子が、目を思い切り見開いている。なんだかんだ言っていたものの、ここまで
するつもりはなかつたのだろう。

階段から落ちる瞬間だと、周囲の景色はやけにゆっくり動く。私の暢気な頭は、異常事
態についていけず、平常運転を続けていた。



――バフン!!

「うわあっ！」

衝撃に体が跳ねた。しかし、予期していた痛みはない。

階段を転がり落ちるのを覚悟したのだが、何か柔らかいものに受け止めもらつたおかげで、痛
い思いをせずに済んだようだ。

「なんだろう、背中がふわふわしてる……」

不思議に思いながら体を起こした途端、甲高い女性の声が聞こえた。

「カミーユ様！ ベッドで跳ねて遊んではダメだと、何度も申し上げたら！」

「……誰？」

目の前に、メイド服を着た幅のよいおばさんが立っていた。

灰色の髪を引っ詰めにした彼女のブラウスのボタンは、厚い脂肪によつて、今にも弾け飛ばんばかりである。スカートの丈は膝上で、結構な短さだ。

歳は五十代半ばくらいだろうか。正直、この年齢でメイドのコスプレはキツイ。自分の母がこんな格好をしていたらと思うと……なんだかしょっぱい気持ちになつてくる。

見慣れぬ部屋と家具、人間。どうやら私は、どこかの家のベッドにダイブしてしまったらしい。私が座っているのは、凝った装飾の白い枠に、シャンパンゴールドの天蓋付きの高級そうなベッドである。慌ててその場から飛び降りた。

……高校の階段から落ちたはずなのに、どうして？ 保健室や病院でもない様子だ。そもそも、ここは一体どこだ？ 疑問が多くて、私はその場を動けないまま、呆然と呟いた。

「ここは、どこ？」

「……え、カミーユ様？」

コスプレおばさんが、ゆっくり目を見開いた。

「なんの冗談かと思いましたが、まさか記憶がないのでござりますか？ だからあれ程、危ないことはなさらないよううにと申し上げましたのに！ ああ！ すぐに旦那様をお呼びしますからね！」

ふくよかなコスプレおばさんは、困惑の表情を浮かべ、オロオロしながら部屋を出ていった……夢に出てきそうな迫力だ。

いや、この状況こそが夢なのだろう。そうに違いない。そうであつてくれ。夢から覚めれば、私は自宅か保健室のベッドにいるはずだ。

「カミーユ！ 大丈夫なのか!? 私がわかるか？」

わけがわからないながら、十分ばかり考え込んでいると、突然部屋の扉が開き、先程のコスプレおばさんと一緒に見知らぬ男性が入ってきた。

男性は、中世のヨーロッパの貴族みたいな服装をしている。おばさんのコスプレ仲間なのかもしれない。

冷徹な印象を受ける、二十代前半くらいの若くてハンサムな男性だ。

高校生の私からすれば、少し大人なもの、まあまあ好みのタイプ。頭がピンク色でさえなければ。

……そう、彼の髪の色は、見事な淡いピンク色だったのだ。

ミニスカメイド服のおばさんといい、このピンクの髪の男性といい、私の夢は強烈な人間ばかりが出てくるなあ。

オタクな私の思考が反映されているのかもしれないけれど……結構な悪夢である。あ、つい考え込んじゃった。一応返事はしなくちゃね。

「わかりません」

なんだか、さつきから喉の調子がおかしい。いつもより少し、声が甲高い気がする。

「わからないうつて……そんな」

男性は困惑の表情を浮かべた。

「だつて、あなたと私は初対面でしよう？」

こんなインパクトのある人達……一度会えば、決して忘れないだろう。

「ああっ！」

ピンク髪の男性は、頭を抱えて蹲うquatまつてしまつた。おばさんが慌てて彼に駆け寄る。

「大丈夫ですか？ 侯爵様！」

「大丈夫なわけがない！ 娘が記憶をなくしたなんて……私が仕事にかまけて、娘を蔑なしがしろにしていたばかりに……！」

侯爵様というくらいだから、この人は偉い人なの？ そしておばさんは、彼に仕えているということ？

事情がさっぱりわからないけれど、妙な設定のコスプレ寸劇に、私を巻き込まないでいただきたい！

目を丸くする私をよそに、二人はしばらく騒ぎ続けていた。

……一体、なんだというのだろう。

そのまま十分程二人はわーわーと取り乱していたが、やがてようやく落ち着きを取り戻したピンク頭の男性が、私に説明し始めた。

「お前は、カミーユ・ロードライト……私の娘だ」

「私の名前は、カミーユ・ロードライト？」

「ああ、そうだ。ロードライト侯爵家の長女で、今年で五歳になつた……」

私は大人しく、彼の説明に耳を傾ける。

そういう設定のコスプレなわけ？

カミーユ・ロードライト……どこかで聞いた名前である。アニメかゲームのキャラクター名だろうか。

そんなことを考へている途中で、私は男性の先程の発言にひつかかりを覚え、慌てて自分の体を見下ろした。

「ん……五歳？ エ、ええっ！」

気が動転していいたせいで、今やつと気が付いたのだけれど、確かに手足が異様に小さい。

しかも、私が着ているのはピラピラした子供服だった。高校の制服から着替えた覚えはないのに……

大ざっぱな私の夢にしては、妙に芸が細かいな。しかし、これは夢なのだから、そこまで大げさに考へる必要はないだろう。適当に話を合わせようかな。

男性達は突然自分の体を確認し始めた私に驚いた様子だったが、私が落ち着いたのを見て自己紹介をする。

「そして、私が君の父親のシャルル・ロードライトだ」

「わたくしは、この屋敷のメイド長のエメ・アフリアですわ！」

色々と思うところはあるものの……とりあえず、目の前の人達はコスプレイヤーなどではなく、本気でこの格好をしているとわかつた。

そういう設定の夢なんだよね？

それから先は、侯爵に代わってエメが熱心に説明してくれた。

ここはロードライト侯爵、つまり私の父だと言い張るピンク頭の男性の屋敷だとか。

彼の妻は娘を生んだ時に亡くなつていて、父子家庭らしい。

説明を受けていた最中に医者を呼ばれ、診察もされた。

「記憶がなくなつたこと以外は、至つて健康だそうだ。何かの拍子に思い出せたらよいのだが」

侯爵は心配そうに私の顔を覗き込んでいる。

とはいえ、思い出せるわけがない。私には、カミーユとして生きてきた記憶自体がないのだから。

彼の後ろから、エメが涙ぐみつつ声をかけてくる。

「今は安静にすることです。カミーユ様、ベッドでお休みになつてくださいまし」

「……う、うん」

遠慮なくそうさせていただこう。起きたら病院、あるいは保健室のベッドにいるはずだ。

ああ！ それにしてもインパクトのある夢だつたなあ。



……おかしい。

目が覚めても夢の続きを見ているなんて。嫌な汗がじわりと肌を伝う。

私は視線だけで辺りを窺い、状況を確認する。

例の高級ベッドで横になり、翌朝、目を覚ました私は……まだあの部屋にいたのだ。

起き上がって外の様子を見ようとしたが、それよりも早く部屋の扉が開いた。現れたのは昨日のメイドおばさん、エメである。

昨日と同じ、ぱつぱつのミニスカートのメイド服姿だ。

「おはようございます、カミーユ様。まだ記憶はお戻りになつていませんか？」

「……まだみたい」

まだ夢の中みたいんですけど、なんですか？

起き上がって見下ろした私の体は、相変わらず五歳の幼女のままだし、周りの景色は見慣れぬものだ。自分が小さいのか、この部屋はとても広く感じられる。

階段から落ちた衝撃で昏睡状態に陥つていて、私はいまだに夢の世界を抜け出せないのだろうか……その可能性はあるな。

できれば、今後の生活もあるので、軽症で済んでいてほしい。

「……仕方がないな」

ジタバタしていても、目覚められる保証はないし、いつ目が覚めるのか私にはわからない。

「なら、この夢を楽しむっていうのもアリかもね」

せつかく侯爵家の娘なんて面白い立場になつているのだ、じつとしていてはもつたらない。

人生をつつがなく過ごすためには、妥協と打算が必要だ。現実では、私は多少の違和感を覚えつも、ずっと周囲に合わせて生きてきたのだから、夢の中くらい好きに過ごしたってばちは当たらぬいはず。

身繕いのため、エメに鏡台の前に立たされてぎょっとした。体の大きさどころか、顔立ちから髪の色まで、すべてが変わっている。

ダークブラウンだった私の髪は、今やお花畠のようなピンク色だ。

そしてぱっちりとした瞳はラズベリー色……現実ではありえない色合いである。

中の上程度だった私の顔立ちは、今や世の大人達がメロメロになりそうな、絶世の美幼女になつていた。

夢の中とはいえ、あの侯爵様と親子設定なだけはある。もう自分のことを棚に上げて、彼をピック男呼ばわりできない。

「お、お父様は……？」

私がぎこちなく問い合わせると、エメが私の髪をとかしながら答える。

「侯爵様は、お仕事に出られていますよ」

「お仕事？　お、お父様のお仕事ってなんなの？」

お父様、あの人はお父様……！　そう呼ぶことにやや抵抗を感じつつも、私は自分に言い聞かせる。

「侯爵様は、お城で最高位の魔法使いをしていらっしゃいます。日々、このガーネット国の安全を守られているのです」

「へえ……」

ガーネット国……聞き覚えのある名前だな。しかも、最近聞いたような気がする。

それにしても、魔法使ひって一体何をするのだろう……よくわからないが、凄そうな仕事だ。

頭の中に、某アニメの魔法使いの姿が浮かんだ。彼は毎回ド派手な魔法を使って、華麗に悪を倒している……そんな感じなのかな。

「この世界には魔法が存在するんだ……格好いいね」

私のオタク心がウズウズしてきた。ファンタジーは大好物である。

「魔法か……いいな。私もやりたい！」

幼いころ、某ファンタジー小説の魔法使いの主人公に憧れていたものだ。

魔法を学べる学校に通うのが夢だった私だが、中学生になつても、魔法学校からお呼びがかかることはなかつた。仕方ないので、近所の公立高校に入学したのだ。

本性を表に出さないだけで、実は自分がかなりイタイ女なのだと自覺している。

でもいいや。どうせこの世界は夢なのだし、ここにいる限りは私の好きにさせてもらう。

「侯爵様が戻られましたら、相談してみましょう。それにしてもカミーユ様、なんだか雰囲気が変わられましたね……」

エメは、私が昨日から急に賢くなつたと首を傾げている。

中身は女子高生だもの、当然だ。しかし、そう言つたところで理解はされないだろう。

「そ、そうかな？」

元のカミーユがどんな性格だったかはわからないけれど、五歳児だから、多少人格が変わつても許容範囲……だよね？ うん、一応子供っぽく振る舞つておこう。

何より、これは私の夢なので問題ない！ きっと大丈夫！

エメが部屋から出ていったあと、私はベッドに腰かけて考え込んでいた。

「しかし、いつになつたらこの夢から覚めるのかな……なんか長くない？」

現実の世界でやりたいことも、たくさんあるというのに。

「ああ、早くゲームの続きをしたい……」

そう……半月前にコツコツ買つたあの乙女ゲームだつて、私はまだ途中までしかプレイできない。早く全キャラのルートをクリアしたいなあ。

私はオタク女と思われないように、乙女ゲームオタクであるという事実を隠して生きてきた。ゆえに、基本的に自分の部屋でしかゲームをしない。

必然的に、私のプレイ時間は帰宅してからとなり……ぜんぜん話が進まないのであつた。

しかも、そこそこの成績を維持するために、勉強に大幅な時間をあてている。

無駄を省こうと、選択肢はすべてネット上の攻略サイトを見つつ選択。先人達のお導きにより、私のゲームライフは守られていた。

最近やつっていた乙女ゲームも、攻略方法をチェックしながら着実に進めていて……

——ん、待てよ。この世界つて……。

「あの乙女ゲームの設定に似ている、よね……」

うん、そうだ。カミーユ・ロードライト侯爵令嬢つて名前の、ピンク色の髪の登場人物がいたもの。

それに、ガーネットという国名は、物語の舞台となる國の名ではなかつたか？
「夢にまで出てくるなんて！ あのゲームに相当な執着があつたんだな……」

——『ギヤルト・ア・ジュエ』。

フランス語でトランプを意味する言葉で、私がプレイ中だつた乙女ゲームのタイトルである。タイトルを反映して、トランプの四つのマークをモチーフとしていた。

舞台はハート、ダイヤ、クローバー、スペードの四大勢力が争うエリート魔法学園。そこで、平凡なヒロインの少女が美形男子と恋愛し、成り上がる……という内容だ。

主人公の恋のお相手、つまり攻略対象は、各勢力のトップのイケメン男子……Kと呼ばれる生徒達だ。彼女は四大勢力の、いずれかのKと恋に落ちるわけである。

乙女の願望を詰め込んだ恋愛ゲームだけあって、攻略対象はもれなくハイスペックな人物達

だつた。

そのゲームの中に、この夢と共通する設定が出てくるのだ。
さて、ここからが重要である。

『キャルト・ア・ジュエ』には勢力ごとに一人ずつ、合計四人のライバル女子が登場する。ヒロイ
ンの恋敵だ。

彼女達はQ^{クイン}と呼ばれていた。

そして、今の私と同じ名前のキャラ……カミーユ・ロードライトは、ライバルの一人ハートのQ
なのだ。

カミーユは、ピンク色の髪がトレードマークで、ぱっちりとしたラズベリー色の瞳を持った美少
女である。

ただし、^わ我が儘な勘違いぶりっ子で、自分が世の中で一番美しく、愛されている存在だと信じて
疑わない、少々イタい令嬢だ。ハートのKに想いを寄せる彼女は、ヒロインが彼を攻略しようとする
と登場し、ことあるごとに嫌がらせをしてくる困ったさんである。

もちろん他の攻略対象を選んでも、各勢力に一人ずついるライバルのQ^{クイン}がKとの恋愛の邪魔をして
くる。カミーユはその中でも特に性格が悪く、腹の立つライバルキャラであった。

女のねちっこくて嫌な部分を集合させて人型にしたら、きっと彼女になる。

私はハートのKのファンだったこともあり、余計に彼女が嫌で仕方なかつた。

ハートのKルートのハッピーエンドでは、彼の側近であるハートのJ^{ジャック}の手によって、悪役らし

く破滅してくれたので、清々したのだけれど。

「……って、まさか今の私は、あのカミーユ!?

しかし、このままいけば破滅してしまうのでは、という考えはない。

何故ならば、これは夢だからだ。

乙女ゲームに似た世界が夢に出てくるなんて、なんとも私らしいではないか。

「私が破滅なんて、するはずナイナイ♪」

ゲームの設定は置いておき、当初の予定通り好きなことをしよう！ せつかく、他人の目を気に
せずに行動できる夢の世界なのだから。

羽の付いた金色のボールを追いかける競技はあるのだろうか。あれば、ぜひとも参加したい。



……おかしいなあ。

私がカミーユ・ロードライトになつてから数ヶ月経つたが、まだ夢の世界を脱出していない。

仕方がないので、引き続きこの世界を楽しんでいる。なんと言つても、憧れの魔法がある国だ
もの。

自分の姿がカミーユ・ロードライトだというのは、ちょっと微妙だ。けれど、子供の姿だから可
愛らしいよねと我慢している。

今のところ、この姿で不利益を被っているというわけでもないし……夢なので、きっと時間の感覚も違うだろう。もし目が覚めても、それ程時間は経っていない……はずだ。

この数ヶ月で、エメや屋敷の使用人達からカミニュの環境について色々と聞かされた。

カミニュの父であるロードライト侯爵は、魔法好きが高じて魔法使いの仕事に就いたそうだ。今では、王城に勤める全魔法使いを取り仕切る、魔法大臣になっている。

しかし、彼は魔法のこと以外には全く気が回らなかつた。家庭を顧みず、仕事で長期間家を空けることも珍しくない。彼の娘である本物のカミニュは、寂しい暮らしをしていたようだ。

この体の持ち主であつたカミニュと、ゲームのカミニュが同一人物だとしたら、それが原因であのような歪んだ性格に育つてしまつたのだろうか。彼女の傲慢な態度の裏側には、父親からの愛を得られなかつたという悲しい過去が……いや、単に生まれつき性格が悪かつただけかもしれない。家庭を蔑ろにしてきた侯爵だが、私が魔法に興味を持つたことに気付いてからは、頻繁に家に帰つて魔法を教えてくれるようになつた。以前のカミニュは魔法にはぜんぜん興味がなく、父親に懐かなかつたらしい。

親子の関係がいい意味で変わりつつある……と近頃、使用人達は囁いている。今では魔法の授業の時間が、親子の数少ない交流の場だ。

思つたのだが、侯爵は娘に無関心というよりは、魔法以外のことにはどう対処したらよいのかわからなかつたのではないだろうか。実際、魔法を教えてくれる時の彼は、とても優しい父親だ。きっと

と不器用な人なのだろう。

ちなみに、侯爵の仕事が忙しい時は、彼の部下が家庭教師役を務めてくれた。

私は五歳にして、魔法の英才教育を受けているのだ。幸い父ゆずりの魔法の才能がそこそこあるらしい。

「さすが私の夢だ、とても都合がよく出来ている……」

「ん、どうしたカミニュ？」

私の独り言を訝しんだ父が声をかけてきた。

いけない、今は彼の書斎で魔法の授業の最中だつたのだ。魔法に興味のある私は、真剣に授業を受けている。

「いえ、なんでもないです」

私が慌てて答えると、父は私の頭を撫でて促した。

「では、カミニュ。魔力を外に出すイメージで、自分の周囲に透明な壁を作つてみるんだ」

この世界の住人は皆、体内に魔力を宿している。その魔力を外に放出して事象を起こすことを、魔法を使うと表現するようだ。

「はい、お父様」

私は父の教えに従つて、体の中に流れる魔力を、透明な壁に変換するイメージを思い浮かべる。すると、私の周囲に薄く透明な壁がユラリと現れた。やはり、この夢の世界は凄い。

「これは、防御魔法の基本だ。もし、危ない目に遭いそうになつた時には、この魔法を使うと

いい」

父の言葉に、私は殊勝に頷いた。

この世界では、魔法は学びさえすれば誰でも使うことが出来る。すべての人間の体内に、大なり小なり魔力が宿っているからだ。

しかし、魔法についての教育を受けられる場所はごく少ない。魔法に限らず、読み書きや計算にしたところで、教育を受ける権利などというものは、存在しないのだ。

従つて、魔法を自在に扱える人間は、魔法の教師を雇うことの出来る貴族が圧倒的に多かつた。

私が透明な壁を消すと、父は言い聞かせるように口を開いた。

「魔力の使いすぎには気を付ける。カミニユの魔力は平均より多いが、城の魔法使いでも魔力を使いつすぎて倒れることがある」

人間の体内に宿る魔力の量には、限界が存在するのだ。魔力を使いすぎて体内の魔力がゼロになると、体に力が入らなくなり倒れてしまう。

魔力量には個人差があるものの、魔力を使い切った時に現れる症状は同じだ。
もし魔力が枯渇すると、回復するまでしばらく寝込むことになる。

手つとり早く回復させる方法もあるのだけれど、効率的じやなかつたり、出来れば行いたくない手法だつたりするので、魔力を使いすぎないことがベストなのだ。

「そうだ、お父様。^{ほきょく} 篦に跨^{またが}って空を飛んだり、篚に乗つて空を飛んだり、篚にぶら下がつて空を飛んだりする魔法はないの？」

「空を飛ぶ魔法はある……が、何故篚にこだわるのだ？」

この世界には、篚に乗つて空を飛ぶという発想がないらしい。私の夢の世界なのに。そういえば、ゲームの中では派手な攻撃魔法と防御魔法くらいしか出てこなかつたな。

「篚で空を飛べたら、素敵だなと思って」

某魔法学校の生徒達のように、篚で空を飛び回つてみたいというだけだ。我ながら、実にくだらない理由である。

「面白い発想だ、物を浮かせる魔法を応用すれば可能だろう。身一つで空を飛ぶことも出来るが、媒体^{ほいたい}があれば、飛行中の速度調節や方向転換が容易になる」

阿呆^{あほう}な質問にも真面目に答えてくれる父が、私は大好きだ！ もはや、彼の髪の色は気にならなかつた。

このまま夢から覚めなければ、小説の主人公と同様に、本当に魔法学校へ通える日が来るのではないだろうか。

私が魔法の学習を始めて数ヶ月目の、ある日の午後。

侯爵家の庭の一角で、父の部下であるソレイユ・ジェイド子爵が上空に向かつて声を張り上げた。

「カミニユ様、そろそろ降りてきてください」

ソレイユは、コバルト色の瞳が特徴的な甘い顔立ちの男性だ。長い水色の髪を一括りにしていて、物腰は柔らかい。性格も穏やかで、子供好きである。

この世界の人間のぶつ飛んだ髪色については、私はもう気にしないことにした。

父が仕事で忙しい場合には、彼が私の魔法の教師をしてくれている。

今は、屋敷の上空を^{ぼうき}箒で飛ぶ授業の最中だった。

父やソレイユのおかげで、私は安定して空中を移動できるようになつてきていた。

一度、箒に乗つたまま屋敷の外に出たことがあつたが、父にもの凄い剣幕で怒られた。五歳児だから行動に制限がかかるのは仕方ないか……

「はい、今降ります！」

箒をゆっくり降下させて、私は地上に降りた。

すると、ソレイユは私と箒を^{うなず}交互に見て、感心したように頷く。

「それでも考えましたね。箒という媒介を使えば、方向転換が容易になるし、何より安定した速度が出ます」

「お父様も、そんなことを言つていた気がするよ」

箒を使つた飛行には、思いも寄らぬ利点があつたらしい。

「では、次は回復魔法を練習してみましょう」

ソレイユが、整つた顔に穏やかな笑みを浮かべて言つた。

「……私、どこも怪我していないよ？」

「では、私の怪我を治療してみてください。手順は、以前お教えした通りですので」

そう言つて笑うソレイユの顔には、真新しい三本の引っ搔き傷があつた。

猫にでも引っ搔かれたのだろうか。痛そうだ。

「わかった、やつてみる」

私は、ソレイユの頬に手を当てて、少しづつ体内の魔力を彼の傷口へ送り込む。

回復魔法は、纖細な魔力制御が要求される。

傷の治療は、ほんの少しだけ傷口の時間を逆行させて、怪我をする以前の状態へ戻すという方法が一般的だ。

重傷や病気を回復する場合、更に手順が複雑になるので、難易度が上がるらしい。

「いいですね。その調子です、カミーユ様」

しばらくすると、ソレイユの頬の傷は跡形もなく治つた。

「よくできました、初級の回復魔法は完璧ですね」

成功したようだ。ソレイユは笑顔で褒めてくれた。

私は、五歳児にしては異例の速さで魔法を覚えている。

飛行魔法と回復魔法の他に、明かりや火をつけたり、風を起こしたりする魔法を学習した。これらの魔法を応用すれば、更に色々出来るようだ。

「ふふ……勉強熱心な生徒は、可愛らしいです。下の息子も、いつかカミーユ様くらい魔法に興味を持つてくれればいいのですが」

ソレイユは、私に慈愛に満ちた目を向けてくる。彼には四人の子供がいて、一人は私と同じ年頃の少年なのだから。

「可愛くて利発だと、評判の子なんですよ」

彼はいつもその子の自慢をしていた。親馬鹿と言うほかないが、とても微笑ましい。

「そんなに可愛い子なの？」

私も会つてみたいな」

私は穏やかな気持ちでソレイユを見上げた。けれど、それを聞いた彼は僅かに顔を曇らせた。

「あなたにぜひ、息子を会わせたいのですが……残念ながら彼は今、私の傍にいないのですよ」

ソレイユは悲しそうな表情で唇を噛む。何かわけありのようだ。

「どういうこと？」

「息子は街の孤児院に預けられています。お恥ずかしい話なのですが、妻との子供ではないのです」

「ええっ!? ……でもソレイユの子供なんだよね？」

妻との子ではないとなると……まさかソレイユは、愛人との間に子供を作ったということだろうか。

「カミーユ様には、まだ早い話だったかもしませんね」

いや、バツチリ内容を理解していますよ？

ソレイユは大人しそうな顔をして、愛人との間に子供を作ってしまう人物だつたんだ。女性関係にだらしがないのかな。

もしかして、さつきの頬の傷は……猫ではなく、女性だつたりするのだろうか？

……優しい家庭教師の意外な一面を知つた日だつた。

2 ハートのQ、乙女ゲームの登場人物と出会う

夢の世界にやつて来て一年が経つた。私は六歳になり、使える魔法の数も増えている。けれど、まだこの夢から、目を覚ますことが出来ずにいた。

（これは、本当に夢なのだろうか。私、死んでカミーユに乗り移っちゃつたとか？ ……まさかね）

時々そんな不安が首をもたげるが、あえて深く考えないようにしている。

憧れていた夢と魔法の世界。ここにいるうちは、素敵な世界を楽しめばいいじゃないか。わざわざ、現実のことを考えなくつたつて……

私は、眼下の心配事から目を逸らし、蓋をしている。

そんなある日。私は父に連れられ、彼の仕事場である王城へ来ていた。初めて訪れる城を、私は興味深く観察する。

ガーネット国は領土は小さいが、国としての歴史は古く、魔法分野に優れ、多くの優秀な魔法使いを輩出している。また春夏秋冬の四季があり、緑の豊かな美しい国だ。

国の最高権力者は王で、その下に貴族、更に下に平民という身分制度がある。城で働く者の多く

は貴族だった。

ガーネット国^{ガーネット}の城は、王都の中心に建つていて。

私の住んでいるロードライト侯爵邸^{ロードライト}は、この城から少し南に下った場所に位置する。父が城で仕事をしているので、職場の近くに家がある方が都合がよいのだ。

侯爵邸から更に南へ下ると、ソレイユの住むジエイド子爵邸^{ジエイド}がある。ジエイド子爵の治める領土は、王都の南にあるのだが、彼も城に勤めていいる関係上、王都にも邸^{やしき}を持つているのだ。

ソレイユはこの一年のうちに、愛人との間に作った息子を孤児院^{やしき}から引き取つた。

私の「会つてみたいな」^{かくさく}という言葉を覚えていた彼は、父に働きかけて私を息子に会わせるように画策^{かくさく}したらしい。

お嬢様暮らしのせいで歳の近い友人がいない私に、父もソレイユも気を使つてくれたみたいだ。

私と会う予定のソレイユの息子は、子爵である彼と平民の愛人の間に出来た子供らしい。

親馬鹿のソレイユのことだから大丈夫だとは思うのだけど、引き取られた愛人の子が、正妻のいる屋敷で肩身の狭い思いをするというのはよくある話だ。しかも、正妻は息子一人と娘一人を生んでいる。その子達にいじめられる可能性^{おそれ}だってあるはずだ。

よその家のことながら、穏やかに過ごせているのだろうかなどと、余計な心配をしてしまう。

「そういえば……」

父が部下と仕事の話をしているのを待つ間、私はふと例の乙女ゲームにも、そういう生き立ちはの登場人物がいたことを思い出した。

愛人の息子として虐げ^{じいた}られてきた過去を糧^{かて}に成り上がって、ヒロインと同じ学園に通い、攻略対象の片腕として暗躍^{あんやく}する人物が。

「まさかね……ソレイユの息子が彼なわけがない。ナイナイ、ナイナイナイ」

私は、頭に浮かんだ嫌な考えを振り払おうと、大きく首を横に振つた。

敬愛するハートのKのために、邪魔者のハートのQを社会的に抹殺^{まつさつ}する人物が、ソレイユの息子だなんて……そんな恐ろしいこと、あるはずがないよね。ヒロインに悪意ある嫌がらせをし続けたカミーユは、ヒロインに想いを寄せるハートのKに疎まれ、彼の腹心によつて社会的地位を失つてしまつ。ゲームの中でそのキャラクターがカミーユにしかける数々の報復行為は「鬼畜^{きちく}」の一言に尽きる。プレイヤーからは「よくやつた！」と絶賛の風だつたのだが……今の私の立場では、そもそも言つていられない。

「ナイナイ、ナイナイナイナイ……たぶん」

仮に、ここがあの乙女ゲームと全く同じ世界だとしても、カミーユが破滅^{はめつ}するのは成長して魔法学園に入つたあとだ。破滅を迎える十七歳までまだ十年以上もある。

そのころまでには、きっと夢から覚めているだろうから大丈夫」私は、再びこの世界について深く考へることを放棄し、心配事を閉じ込めた蓋^{ふた}の上に重石^{おもし}を載せたのだった。

父の仕事の話が終わつたあと、彼の普段の仕事場——魔法棟に行くことになつた。その建物に入り、休憩室へ案内される。

「ここで待つていなさい」

そう言うと、父は部屋の外に出て行く。先に来ているソレイユ達を連れてくるのだそつだ。

魔法棟の中では、たくさんの魔法使い達が働いているらしい。

他の魔法使い達は、どんな風に働いているのだろうか。

気になつたので、窓際に立つてこつそり部屋の外を覗いてみると、城で働く魔法使い達の姿が見えた。皆、忙しそうに歩き回つてゐるが、残念ながら魔法は使つていない。

彼らの制服だろうか、全員、同じ形のローブを羽織つてゐる。ローブの色は数種類あるようで、一見したところ、黒と赤と青の三種類が確認できた。

私が服装よりも気になつたのは、彼らの多くが顔や手に不思議な刺青ハリキミを施してゐることだつた。

実は、父も腕と背中に刺青がある。着替えの時にチラリと見えてしまつただけだ。決してノゾキをしていたわけではない。

その時は「うわあ、人は見かけに寄らない……」と若干引いてしまつたのだが、魔法使いの多くが刺青をしているということは、職種的に必要なものなのかもしれない。

よし、今度、父に聞いてみよう。

そうこうしている間に、父とソレイユが小柄な男の子を連れて部屋に入つてきた。

「……おお」

その少年を見て、私は思わず感嘆の声を漏らした。

キャラメル色の髪にコバルトブルーの瞳、並外れて整つた顔立ちの美少年。髪の色は違うけれど、全体的にソレイユ似だ。五、六歳くらいの子供なのに、色氣のある甘い空氣を纏つており、お坊ちゃんっぽい紺色の外出着がよく似合つてゐる。

かくいう私の格好は、スカートが膝丈の、葡萄色ぶどういろのお出かけ用ドレスだ。さほどフリフリしたデザインではない。

笑顔のソレイユが、私の正面に少年を押し出した。

「これは息子のアシルです。カミーユ様と同い年なんですよ」

父親に紹介されすぐ、美少年が私を見つめて甘く笑う。

「ん……？」

なんだか、少し違和感を覚える。目の前にいる彼の子供らしからぬ微笑は、本心からの表情ではなさそうだ。

ハッキリと断言出来ないけれど、私の反応を興味深く窺つてゐるように思える。

もしかして、私を踏みしていとか……？ まさかね。

「はじめまして、カミーユ様。アシル・ジェイドと申します」

そう言って手を差し伸べる彼の目を見た途端、私の疑惑は確信に変わつた。この目を私は知つてゐる。

これは、自分が女性に好感を持たれる容姿だと、理解して振る舞つてゐる男の目だ。異性に嫌わ

れることなどないという自信が見える。

彼は、どうすれば自分が一番魅力的に見えるかを計算しつつ、私に接しているのだ。異性に免疫のない六歳の幼女ならイチコロだろう。

でも残念、私にはそれを見破れるだけの予備知識がある。こういう男は、現実の世界でもいたからだ。

そこそこイケている女子だった私は、気軽に声をかけることが出来て、かつ彼らの体面は保てる都合のいい女として、格好の獲物えものだつた。

高校生になつてからの私は、そんな理由で見知らぬチャラい男子生徒に上から目線で声をかけられることが多かつたのだ。

眞面目な恋こゝろがしたい私としては、軽いノリで付き纏まといわれるのは、かなりの苦痛だつた。

……それにしてもアシルという少年。こんな子供のころから、自分のお顔を有効活用するなんて、将来口クな大人にならないぞ。

「はじめまして、カミーユ・ロードライトと申します」

スカートの裾すそを揃そろんで、ちょこんと令嬢仕様のお辞儀じぎをする。

しかし、カミーユの可愛らしいお顔を活用して微笑ほほえみ返すのはやめておいた。面倒だし、私にここまで器用な真似まねは出来ない。

「どつても可愛らしい方ですね、お父様」

アシルは相変わらず私を踏みするように見ていたが、やがてソレイユを見上げて、鳥肌の立ち

そうな社交辞令を言つた。親馬鹿なソレイユは息子の腹の内に気付くことなく、デレデレと目尻を下げる。

そんな部下の様子を眺めながら、父が私に話しかけた。

「私達は今から仕事だから、二人はこの部屋で遊んでいなさい」

「そうだよね。父は魔法棟の責任者だし、忙しいはずだ。」

父とソレイユはそのまま部屋を出て、仕事に向かってしまった。部屋には、私とマセた少年だけが残される。

急にアシルと二人にされて、私は困った。彼となんの話をしたらよいのだろうか……正直言つて子供は苦手だ。どう扱あつかえばいいのかわからない。

「カミーユ様は、魔法が得意だと父から聞きました。空も飛べるそうですね」

戸惑とまどう私に気付いたアシルが、声をかけてきた。六歳児に気を使われてどうする、私！

笑みを浮かべたアシルがさりげなく距離を詰めてきた。肩が触れ合わんばかりだ。一体どこで、

そんな手練手管を身につけたのか、非常に気になる。

「様はつけなくていいよ、せつからく同じ歳なんだから。あなたの態度うんぬんで騒ぎ立てたりしないし、敬語は使わないで」

面倒くさいので、敬語で話すのをやめてもらうように言つてみた。

令嬢ごぜいらしからぬ言い種くわかなと思つたけれど、子供相手に堅苦しいのは嫌だし、どうせ一人きりだから大丈夫だろう。

「アシルはとても頭がいいって、ソレイユに聞いたよ。勉強が好きなの？」

アシルは少し迷っていたが、私の話を受け入れてくれたらしく、くだけた口調で答えた。

「ああ、勉強くらいしかすることがないんだ。あまり部屋を出るなど言われているから」

愛人の子供ということで、行動が制限されているのだろう。

今日の外出は、特例中の特例だったのかもしれない。だとしたら、少しは楽しませてあげたいな。

そう考えつつ、ふと部屋の隅に目をやると、掃除用具の箒すみがあつた。いいもの見つけ！

さつそくそれを手に取り、私はアシルに声をかける。

「久々の外出なんじやない？ せつかくだから、パーツと遊ぼうよ」

「え……？」

私は箒またがに跨り、アシルを手招きした。幸い窓は開いている。ここから飛び出して、王宮を一周り

したら楽しそうだな。

上空だから見とがめられることもないとと思うし、万が一見つかったとしても子供一人だ。軽いお説教で済むだろう。

何より、子供の体になつてからというもの、部屋でじつとしているのは退屈で耐えられなくなつた。最近、私の精神年齢が、だんだん低くなつているような気がする。

「跨つて」

コバルト色の目に不安を浮かべて戸惑うアシルを強引に後ろに乗せ、私は床を蹴けつた。ふわりと箒が浮き、窓の外へ向けて動き出す。後ろで彼が息を呑むのがわかつた。

「アシル、しつかり箒に掴つかまつていて！」

城は侯爵邸の庭よりもずっと広く、飛び甲斐あひがありそうだ。

魔法棟が下に見える。先程まで私達がいた、円形の塔のような建物だ。その裏の畠には、植物がたくさん植えである。魔法薬用の薬草を育てているのかな。

「カミーユは、どこへ向かう気なの？」

落ち着きを取り戻したアシルが声をかけてきた。もっと慌ててくれてもよかつたのだが……彼は、もう余裕の笑みを浮かべている。

それにもしても、箒の柄えを持ってと言つたのに……この少年は、どうして私の腰に手を回しているのだ？

「どこへ向かうかは決めてないよ。お城の周りを大きく一周しようかな」

「そつか、じやあ偉い人が住んでる近くに寄つてみようよ。近付きすぎると警備の人間に見つかるかもしれないから、少し離れて飛んでね」

「面白そだね……でも、どっちに行けばいいかな？」

「奥の方じやない？」

私達は、偉い人の居住区がありそうな方角へ向かう。

しばらく箒で飛び回つていると、綺麗な庭が見えた。

庭の真ん中にある白い噴水の周りに、バラの花が咲き誇つている。赤、白、ピンク、様々な色が

まざり合つていて、まるで絵のような景色だ。

ふと、人の声が聞こえた気がして声の方向を向くと、私達と同じ年頃の子供達の姿が見えた。

庭の隅で、綺麗な金髪の小さな男の子が、貴族らしい少年達に囲まれている。周囲の少年達の方が、少し年上みたいただ。

「あの子達、何をしているんだろう」

私は上空に留まり彼らを観察した。遊んでいるにしては、ちょっと様子がおかしい……

窺うように背後のアシルを振り返りながら、私は呟く。

「……これは、イジメなのかな」

一人の子供が金色の髪の男の子の胸ぐらを掴むと、その周りにいた数人がゲラゲラと笑い声を上げた。胸糞悪い光景だ。

そのうち、周囲の子供達が金髪の子供を小突き回し始める。

「見てられない。アシル、私あの子を……」

「わかったよ、カミーユ。あの子を助けてあげるんでしよう？」

見計らつたかのようなタイミングで、アシルが耳元で囁いた。思わずゾワワと鳥肌が立つ……わざと同じやないよね？」

「降りてもいいの？」アシルも巻き込んでしまうよ」

「いいよ。あの金髪、たぶん王家の子供だ……俺にとつても、権力者と接点を持つてゐるいい機会だし」

アシルは私の前で取り繕うことをやめたようだ。彼の口からとんでもない言葉が出てきた。

「なつ……」

なんて打算的な子供なんだ、見損なつた！ 正義感ゆえの発言だと思つたのに！

けれど、今はアシルに呆れている場合じゃない。早くあの子供を助けなければ。

金髪の少年は、ついに尻餅をついてしまつた。もしかしたら、怪我をさせられるかもしれない。

子供達の一人が彼に馬乗りになろうとするところに、私は籠に乗つたまま突つ込んだ。

「こらー！ やめなさい！」

籠の柄がお尻にぶつかり、いじめっ子がひっくり返る。

すぐに起き上がつた子供は顔を真つ赤にしながら、痛そうにお尻をさすつていた。

「なんだよお前は！ どうから湧いて出た!?」

「どこでもいいでしょ！ そんなことより、小さい子を寄つてたかつていじめて、恥ずかしいとは思わないの!?」

チラツと様子を窺つてみたら、私が籠から降りて啖呵を切つてゐる隙に、アシルが金髪の子供を助け起こしているのが視界の隅に映る。

「うつせー！ クソ女、出しやばんなよ！」

「そーだ、そーだ。クソ女は引っ込んでろ！」

近くにいた大柄な子供が、私に向かつて殴りかかってきた。

「げつ！ 暴力反対！」



今の私はか弱い六歳児だ。肉弾戦は得意ではないので、咄嗟に魔法で防御する。

それにしても、クソ女とは失礼な！

私の手から出た淡い光が、いじめっ子との間に透明な壁を作る。父に教えてもらつた、簡単な防御魔法だ。

魔法を見た周りの子供達が動きを止めて目を見張つた。この年齢で魔法を使う人間は珍しいのだろう。

「カミーユ、今のうちに^{はつまき}箒に乗つて！」

アシルの声で、私はハツとした。確かに今はここから離れた方がいいよね。少年達を防御魔法で足止めしながら、箒の先頭に跨る。

金髪の少年とアシルは既に箒に乗つていて、準備万端だ。

私は箒を浮かせ、高度をぐんぐん上げた。あつけにとられたいじめっ子達が、ぱかんと上を眺めている。私はケケケと笑いながら、挑発するように奴らの頭上で箒を一周させた。

「そうだね、アシル」

私は旋回して、魔法棟へ向かう。

それにしても箒が重い。三人も乗っているから当然なのだが……自転車の荷台に、二リットルのペットボトル飲料をたくさん括りつけた状態に似ている。

すぐに、魔法棟の窓が見えてきた。それ程離れていくなくてよかつた。もう少し遠かつたら、途中

で飛べなくなつたかもしない。

フラフラと目的の部屋に入つて着地する。

「あー、疲れた。重たかった……」

部屋をもとの場所に戻すと、私はソファーに倒れ込んだ。

アシルが呆れた顔でこちらを見ているが、疲れたものは仕方がないじゃないか。

「大丈夫？」

私達が助けた金髪の子供が顔を覗き込んできた。うわあ、彼も美少年だな。

サラサラの金色の髪に透き通った碧色の瞳、白地に金のラインが入つた高級そうな服……まるで物語の王子様みたいな外見である。

「二人とも、助けてくれてありがとう。僕はロイス・ガーネット。この国の王太子だよ」

本当に、王子様だったようだ……

「……ん、までよ？ ロイス・ガーネット？」

その瞬間、私の体中の血が沸騰した。

「ロイス・ガーネットって……あの、ロイスさまああああああああああああああ!?」

ロイス・ガーネットは、乙女ゲームの攻略対象の名前だ。こんなところで出会うとは！ やつぱり、この夢は乙女ゲームの世界なのだと改めて認識する。

何を隠そう、私はロイス・ガーネットの大ファンだったのだ。彼は例のゲーム『キヤルト・ア・ジユエ』の攻略対象の一人で、ハートのKである。

私はプレイ中に、彼のキラキラした爽やかな微笑みに何度もハートを打ち抜かれた。恋のお相手としてロイス・ガーネットを選んだ場合の物語はこうだ。

王太子の重圧を抱えつつ、魔法学園に入学したロイス様。次期国王としての自分に自信が持てなかつた彼は、ヒロインに熱心に励まされるうちに、いつしか彼女に恋愛感情を抱くようになる。

ヒロインはハートのQの妨害を含む数々の試練に打ち勝ち、ロイス様と結ばれ、最後にはなんとガーネット国の人妃になってしまうのだ。

愛しい彼をゲットし、成り上がりも大成功というわけである。

「そういえば……」

私は、近くに佇んでいるアシルを見た。彼も、どこかで見た気がするのだ……

このマセガキ……アシルも、やはりゲームの登場人物ではないだろうか。さつきも思つたけれど、彼のような生い立ちのキャラクターが、ゲームに登場していたはずだ。

ロイス様とアシルの二人を見ているうちに、夢の中で一年経つて薄れかけていた私の記憶が、徐々に鮮明になっていく。

アシルは、恋愛対象になるキャラクターではない。彼のルートは、友情エンドしか存在しないのだ。

「やつぱり……アシルって、もしかして」

瞬間、私の全身の血の気が引いた。

アシルは……ハートのQを徹底的に陥れるキャラ、ハートのJではないだろうか。

ちなみにJというのは、ヒロインと恋人同士にはならないが、友人になるルートのある男性キャラクターの総称である。

ハートのJは、ゲームの中ではロイス様の優秀な側近だった。

「まずい！ やばい！」

私は意図せず、天敵に近付いてしまったようだ。

ど、どうしよう……私はもしや、ゲーム通りの人生を歩んでいるのではなかろうか。

ハートのKとJが、ハートのQの目の前で出会ってしまった！ なんて悪夢！

（そうだ、これは夢だ、夢、夢、夢……私が社会的に抹殺されるなんてありえない。ありえないに決まってる！）

この世界がだんだん恐ろしくなってきた私は、今まで通り深く考えることをやめた。考えたつて仕方がない。問題は先送りにしよう。

その後、魔法棟の休憩室でロイス様と話をし、私達も彼に自己紹介をした。

ゲームでのロイス様は、正統派王子様という雰囲気の美青年だった。幼い彼もキラキラしており、どこか気品が感じられる。

「君達のおかげで本当に助かつたよ、情けない姿を見られてしまったけれどね……」

肩を竦めて少しはにかみながら、ロイス様は私達にお礼を言つてくれた。

「いいえ、たまたま通りかかつただけなのですが、殿下のお役に立てて嬉しく思います。ご無事で何よりでした」

私の隣でニコリと笑うアシルは、完全に営業モードに入っている。

まだ六歳だというのに……かなり打算的な奴だな。将来が思いやられる。

「かしこめる必要はないよ。年も近いのだし、これからも僕と仲良くしてくれると嬉しいな。僕にはあまり親しい友達がいなくて……」

そう言うと、ロイス様は少し目を伏せて悲しげな顔になつた。ゲームではその辺りの事情は描かれていたなかつたけれど、彼は孤独な環境で育つたのだろうか。

「ロイス様……じゃあ私、お父様にお願いしてアシルとまた遊びにきますね！」

憧れのロイス様に会えるし、アシルを家から連れ出す口実にもなる。我ながらいい考えだ。

「本当かい？」

綺麗な碧色の目をくしゃっと細めて、ロイス様は嬉しそうに私の手を取つた。彼の全身にキラキラしたオーラが漂つていて。ああ、可愛いな。

「もちろんですよ、ロイス様！ お父様の許可が出ればですが」

「僕が、そのように取りはからうよ」

さすが王太子だ。彼の一聲は、城の魔法使いのトップである父をも動かせるらしい。

「カミーユ、待たせたな」

「あ、お父様！ お帰りなさい、お仕事お疲れさま」

しばらく三人で話をしていると、仕事を終えた父が休憩室に入つて來た。あとからソレイユも

続く。

父とソレイユは、私達と一緒に座っている笑顔の王太子を見て固まつた。ソレイユはハツと我に返ると、そのままロイス様に向かつて問いかける。

「で、殿下!? どうして、ここにおられるのですか?」

ロイス様はソレイユの質問には答えずに、キラキラした笑顔を彼に向けた。

ソレイユは、慌てて休憩室を飛び出して王太子の所在を連絡しに行く。

「無事でようございました、ロイス殿下」

やがてキリリとした執事風の紳士が、休憩室の出入り口に現れた。

年齢は四十から五十の間といつたところだろうか。モノクルがキラリと光る、いかにも切れ者な

感じの上品なオジサマである。

「アンリ、心配をかけたね。従兄の取り巻きに囲まれてしまつたところを、この二人に助けてもらつたんだ」

オジサマはロイス様の言葉に心得ているとばかりに頷き、私とアシルの顔を交互に見た。なんなのだろう?

「ようございましたね、ロイス殿下」

……アンリという人は、どうもよくわからない。

ロイス様達は私とアシルにここで待機するよう指示を出すと、父とソレイユを連れて休憩室の外へ出でしまつた。

残された私は、やはり何が起こっているの理解できず扉の方を眺める。そんな様子を見かねたのか、アシルが私に話しかけてきた。

「ねえ、カミーユはこれでいいの? ロイス殿下と仲良くするつてことは、王弟派を敵に回すといふことだけど……」

「ん、王弟派を敵に回すって? どういうこと?」

何故、いきなりそのような話が出てきたのだろう。私は首を傾げた。

すると、アシルが丁寧に説明してくれる。

「今日、カミーユと俺は王弟派を敵に回したんだよ。たぶん、ロイス殿下を取り巻んでいたのは王弟派貴族の子息達だ。だから、これからは家族も含めて、嫌でも國王派の一員として見られるようになる」

そういうえばゲームの設定に、アシルが言つてゐるのと似た話があつた気がする。

私はあの乙女ゲームの設定を思い出し、やつと事情を理解した。

「ああ……そういうことなんだね。アシル」

今の王様——ロイス様の父親と王弟殿下は、とても仲が悪い兄弟なのだ。王弟殿下はあからさまに王位を狙つていて、野心を隠そうともしない。

この国の貴族達は、王を支持する國王派と、王弟を指示する王弟派で真つ二つに分かれている。その争いが彼らの子供達に波及して、子供同士も対立しているという話がゲームの中にあつたのだ。

そんな中、今日、偶然私達と出会った。

もしかすると、将来の対立に備えるために、ロイス様は早いうちに信頼できる味方を見つけて、自分の傍に置いておきたいと考えていたのかもしれない。だから、私達を決して逃がさないためにすぐに身分を明かし、同情してもらえるように振る舞つた。

「さういやり方だけど、派閥争いに巻き込まれた彼の境遇を思うと、反発する気持ちは湧かない。きっと、今外で話しているのも、派閥争いに関することだと思うよ」

そう言うアシルは、城の情勢にやたらと明るいみたいだ。普通の六歳児は、こんなこと知らないよね……

「勝手に派閥争いに巻き込んだやつて、お父様には悪いことをしたかなあ……」

父である侯爵は魔法にしか興味がない人なので、今まで面倒な派閥争いには加わっていなかつたが……今日の私の行動で、国王派のレッテルを貼られてしまつたかもしれない。

けれど、不思議と後悔はしていなかつた。

「私は大丈夫だよ、アシル。きっと、いずれはどちらかの派閥に付かないといけなかつただろうし、私はロイス様が好きだし……」

「……え、好きって？」

アシルがギョツとしたように目を見開いた。

「カミーユって、玉の輿^{たまこし}が狙いだつたの？」

「違うよ、何言つてるの？」

「カミーユは未来の王妃の座を狙つてるのかなつて……」

「そんなわけないじやん！」

それは無理でしようと強調すると、アシルは何故か笑顔になつた。

ロイス様は私の憧れの人なのだ。お近付きにはなりたいけれど、その伴侶になろうとまでは考えていいない。

所詮^{しょせん}、カミーユはロイス様と結ばれないキャラだしなあ。

乙女ゲームの中のロイス様は、カミーユのアタックに困惑し、彼女から逃げ回つていた。彼にあんな風に避けられるのは辛いし、嫌われたくない。

ついでに言うと、アシルに破滅^{ほめつ}させられるのもご免だ。まあ、この世界は私の夢なので、現実に破滅することはないとと思うのだけれど……

「そうだよね。今のところカミーユはロードライト侯爵の一人娘だし……お嬢^{むすめ}さんを貰つて、侯爵家を継がないといけないものね」

私の内心を知らないアシルは、一応は納得したようだ。

「そうそう。ロイス様だって王太子なんだから……国のためを思つて相手を選ばなきや」

例えば、悪役令嬢である私ではなく、ヒロインを選ぶとかね。さもないと……

「あ……そういうば」

私は、ハタと気が付いた。ロイス様は、ゲームの中で破滅を迎えるパターンが最も多い人物だということに……

ゲームにおけるロイス様の波欄万丈具合は、カミーユの比ではなかつた。

彼の場合、ヒロインがハートのK以外のルートに進むと、自動的に破滅へ向かつてまつしぐらになつてしまふのだ。

例えば、ヒロインが王弟の息子でロイス様の従兄いとこ、スペードのKを選んだ場合、クーデターにより国王とロイス様は失脚しつきやくする。

隣国の王子であるダイヤのKを選ぶと、両国間で戦争が起こり、ガーネット国が負けてロイス様は一生幽閉ゆうへいされる。

ヒロインの幼馴染おさななじみの、平民であるクローバーのKを選べば、革命が起こつて王家が滅び、ロイス様は処刑される。

ダメじゃん……ロイス様……

たとえ夢の世界であつても、私は大好きな彼に破滅へ向かつてほしくなかつた。

ロイス様とカミーユが結ばれることは不可能でも、私は彼に生きていてほしい。それくらいの望みなら、きっとカミーユにも許されるはずだ。

ただの侯爵令嬢では、大して彼の役には立てないかもしない。

けれど、幸い私はゲームの内容を知つてゐるし、その知識を使つて、ロイス様を危険から遠ざけることは出来る。私は決意した——

「ねえ、アシル。私、これからロイス様を護まもる魔法使いになるよ！」

今以上に魔法を勉強して……少なくとも、ここにいる間は彼を護れるように。

突然の宣言に、アシルは驚いて私を見た。彼はそのまま少し考える素振りを見せたあと、不意に私の手を取る。

「あ……アシル？」

「じゃあ、俺もロイス様を助けるよ。彼の傍そばでね」

「……騎士になるつてこと？」

「違うよ。俺がなりたいのは補佐官の方」

「補佐官……。頭を使いそうな役職だね」

そういえば、ゲームでもアシルはそんな位置づけだったと記憶している。筋肉ムキムキの武闘派ではなく、冷静なインテリキャラだ。

「まあね。勉強は得意だから、問題ないよ」

アシルは、面白い遊びを見つけた子供のように、実に楽しそうに笑つていた。私と彼の間に、ほのかな友情が芽生えた氣がする。

少なくとも、今のところゲームのカミーユみたいに嫌われていないし、大丈夫だよね？ 私を社会的に抹殺まつさつしないよね？

不安はまだ消えないが……ここは夢の世界のはずなのだから、ゲームと同じにはならないだろう。「そうだよ。これは夢、これは夢……楽しい出来事しか起こらないし、目が覚めればすべてなかつたことになる」

増幅していく不安に押し潰されそうになつた私は、必死に自分に言い聞かせるのだつた。

立ち読みサンプルはここまで